

ささやかな感性の育ちを観る —ミハルスへの年少幼児のかかわり—

細田 淳子

(平成10年9月30日受理)

An Observation on Growth of Children's Sensibility —An Impact of "Mihalus" on Infant Children—

Junko HOSODA

(Received on September 30, 1998)

1. はじめに

明治初期にはじまる我が国の保育の歴史において、リズム打楽器が導入され始めたのは、昭和に入ってからであり、さらに積極的にリズム打楽器を用いての教育が始まったのは第二次世界大戦後の事であった¹⁾。

その器楽教育史の中で、日本人によって昭和初期に考案された楽器がある。それはミハルスという木製の掌中打楽器で、一時は全国に広まったものの戦後には姿を消してしまっている²⁾。ミハルスは、日本のリズム教育を盛んにしようとの考えから考案されたものであり、両手に持ってカチカチ音を出しながら曲にあわせて踊るという方法で使用されていた。現在多く使われているタンブリン、カスタネット、トライアングルなどのように、きちんと立って身体の前で両手を使って音を出す楽器と違い、動きながら音を出し易いものであった。

動きながら音を出して楽しめる楽器があれば、何も手に持たない状態よりもさらに自由な動きや踊りが子どもたちの中から生まれてくるのではないかと考えられる。さらに、現在の楽器を使った幼児音楽教育が教師指導型で、発表会等の器楽合奏を目的にしているものが大変多いことは、周知の通りである。こういった現状を打破するためにも、ミハルスのような楽器が何か示唆を与えてくれるのではないかと推論することができる。そこでミハルスを模作して実際に幼児とのかかわりを観察し、考察することにした。

2. 本研究の目的

ミハルスは自発的な身体表現を導きだすきっかけとなり得る、という仮説をたて、復元したミハルスを保育現場に持ち込んでみた。その結果、幼稚園の子どもに関しては、音を出しながら両手を自由に動かして遊ぶ子どもの様子が観察できた³⁾。

次に発達を通して保育所における年少幼児とミハルスのかかわりを見ることにした。すると1~2歳の保育所の年少幼児の反応は、幼稚園における4~5歳の年長幼児の反応と違っていた。ミハルスを手にするだけで身体を動かし、踊り出すのではなく、午睡の前にミハルスを叩くことで気持ちが落ち着いてきて静かになり眠ってしまうような様子が見られたのだ。今後、前者を動の方向、後者を静の方向への反応と呼ぶこととする。

本論では、1~2歳児が、木と木の打ち合わされる音に、落ち着いて耳を傾ける様子を詳しく考察する。この楽器が子どものところに及ぼす影響を、かすかなものに対する感性の育ちという視点から探っていくことにする。

3. 子どもの感性

3-1 定義

今日感性という言葉は、日常会話でも多く使われているが、心理学的辞典によると感性(sensibility)は「概念を構成する能動的な知性に対して、対象から刺激を受ける受動的なはたらき」を意味している⁴⁾。

本論においては、子どもの感性を、「子どもが何かを感じるころである」と定義し、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚などの五感を使って感じ、感情・認知・知性

の働きを起させるものである、と考えることとする。

寺内定夫は、「子どもの感性を形成しているのは、五感、感情、認識力、想像力および、その全体にかかわる共感性の五つの要素である」とその著書『感性があぶない』の中で述べている⁵⁾。おとなと違って子どもの感性の場合、寺内のいう共感性は特に重要な要素であると考えられる。一方、片岡徳雄は感性を「価値あるものへ向かう感情、またはそのような感情を起す準備状態である」と述べている⁶⁾。しかし、子どもにとっての価値のあるものと、おとなにとってのそれが必ずしも一致するとは限らない。また、例えば聞こえた音を、きれいだと感じた時も嫌な音だと感じた時も、子どもが感じたままを感性として受け止めたと思う。つまり、片岡のいう価値あるものには、嬉しいとか、きれいだとかというプラスの価値だけでなく、きたないとか、いやだなというようなマイナスの価値をも含めて本論では考えていく。

平成2年より施行された新しい幼稚園教育要領の中にも「感性」という言葉が次の部分にうたわれている。第2章ねらい及び内容の5番目に、感性と表現に関する領域「表現」があり、「この領域は、豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性をゆたかにする観点から示したものである。」となっている。そして、1.ねらいの(1)に「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」とある。さらに留意事項の中にも感性という言葉は、次のように書かれている。(1)「豊かな感性は、日常生活の中で美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し様々に表現することなどを通して養われるようにすること。」

つまり子どもたちが自発的に何かを表現するためには、まず美しいものを美しいと感じ、嬉しいことを嬉しいと感じ、悲しいことを悲しいと感じるというような感性を育てることが先決であるということであろう。人間として最も基本的なそれらの感じる心をわざわざ保育の中で目標としなければいけないのは、現代日本の保育環境がそれだけ殺伐としていることを示しているのかもしれない。

3-2 感性はどのように育つか

教育要領の中で領域「表現」の中に感性という言葉がでてきたが、それを音楽や造形のことだけに限って考えることは危険であろう。子どもの生活全てに渡って、子どもがさまざまに感じているところの動きや育ちを感性

としてとらえ、育てていかななくてはならない。

子どもの感性を育てる条件としては、いろいろな経験を豊かにできる環境が子どもの周りにあることが挙げられる。豊かということは、大きく刺激的なという意味ではない。ほのかで、ささやかな体験を日常生活の中で豊かに行なえる環境が整えられていることをいう。例えば朝目覚めた時からテレビの大きな音声で充滿している部屋ではなく、朝の風のそよぎが感じられ、小鳥の鳴き声が聞こえるような環境が、感性を育てやすい環境と言えよう。もちろん悪化する都市部の保育環境では、不可能な事も多いが、与えられた中で最大限、子どもにとって豊かな体験のできる環境を作っていく必要がある。

さらに、子どもの感性を育てるために必要なものは、共感する人の存在である。共感できる人というのは、感性豊かな人でなくてはならない。子どもの感動したことに一緒になってこころを動かしたり、自分が感動したことを子どもに伝えたりすることで、感性を共有し、感動を深めることができるようになる。

4. ミハルスの模倣

4-1 ミハルスとは何か

ミハルスは、千葉^{みはる}躬治(1904~1995)によって昭和8年頃に創案された、両手に持って踊りながら打ち鳴らす木製打楽器である。(写真1)日本古来の「四つ竹」やスペインの「フラメンコ用カスタネット」をヒントにして考えられた。第二次世界大戦の前には、全国的に広く使われたようであるが、戦後は現在も使われる「ハンドカスタ」の出現により急速に姿を消してしまった。今となっては幻の楽器である。

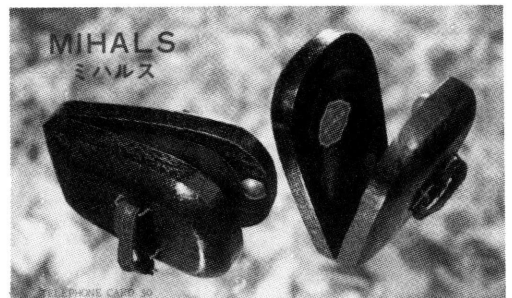


写真1 ミハルス(戦前のもの)

小学校の音楽教師であり、舞踊家でもあった千葉は、日本のリズム教育の遅れを取り戻そうと、リズム訓練法

の創案を目指しているうちにこの楽器を生み出したのだという。器楽教育のために考え出された楽器ではなく身体を動かしながらリズムを打つことのために作られたところが、ほかの簡易打楽器と大きく違う点である。そして自身の名前からミハルスと名付けた。

4-2 ミハルスの模作1 1996年

当時のミハルスは戦火で灰になったり、50年の間に紛失してしまったようで、筆者の探したところ、製作者の千葉の所有していたもの以外には発見できなかった。4年前に千葉は他界しているため、そのミハルスを長男の千葉馨より借用し、模作を試みた。(以下模作1と呼ぶ)

大きさは大体模作して作ることができるが、材質が何であるのかわからない。黒いニスを塗ってあるため木目や色などから判断することができない。50年の年月を経て木はかなり乾いている様子で、乾いた高い音がする。良い音のするカスタンネットの材料と言われているローズウッドなどでは、細工するのに固く、筆者の手に負えないと考えやわらかい朴の木を素材とし、彫刻刀を使って一つずつ手作りした。当時のミハルスと同様に、打点には太鼓鉦を打ち、木と鉦が打ち合わされて音が出るようにした。

こうして試作したミハルスを幼稚園へ持ち込み、子どもたちが遊ぶ様子を観察した⁷⁾。

4-3 ミハルスの模作2 1998年

ミハルスと子どものかかわりを観察するために、さらに多くのミハルスが必要になった。幼稚園だけでなく保育所や家庭に於いて、子どもはどのようにして初めて出会うミハルスと遊ぶのかという事を調査するためである。保育室には、調査の時だけ持ち込むのではなく、いつでも子どもの手に届くところにある状態にしておこうと考えた。

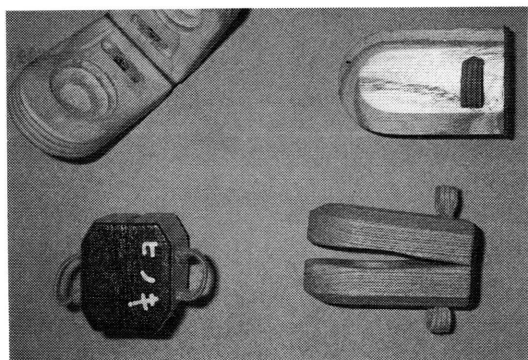


写真2 ミハルス 模作2

そこで木工の専門家に製作を依頼した。(以下模作2と呼ぶ) 幼児のための木製家具などの製作を手がける専門家との話し合いによって、千葉躬治による50年前のミハルスとは音に関して大きく違う楽器が生まれることになった。その大きな違いとは、旧来、太鼓鉦と木が打ち合わされて音が出たところを、木片自体に凸の部分をもたせて削り、木と木の打ち合わされる音が出るようにした点である。木の面に膨らみを持たせる細工は大変手間のかかる手仕事である。よって、採算を考えて販売する場合は、昔も今も太鼓鉦と木片を打ち合わせた音にするより仕方はないだろう。

素材とする木によって、打ち合わせた時の音はかなり違うものとなる。しかし、どのような音がよいのか、子どもの好きな音は低い音なのか、高くカンカン響く音なのかかわからない。この問題は今後の研究課題として、子どもの使う楽器としてはどのような音が望ましく、そのためにはどのような材質の木を材料にしたら良いのかを考えていかなければならない。今後の研究のことも考慮し、今回はさまざまな素材での製作を依頼した。そして同じ形であっても音が全く違う数十種類のミハルスができ上がった。

本論における調査研究は、この試作2のミハルスを用いて行なった。

5. ミハルスと子どもの表現

5-1 ミハルスの特徴と子ども

子どもは、ところが安定し気持ちのよい時に自発的に歌をうたうことがある。その様子を見ると、けして直立不動ではなく身体を気持ち良さそうに動かしている。何かを手を持ち振っていたり、膝や机の上などを太鼓のように叩いていることもある。同様に自発的に楽器を鳴らして遊んでいる時も自然に身体が動いている。子どもが動きながら音を出すのは、自然の営みなのだといえよう。

それは逆に、動きながら音の出し易いものがあることで、子どもの自由な音や動きの表現がもっと生まれやすくなるのではないだろうか。保育室にある楽器の中で動きながら音の出せるものには、リングベルと呼ばれる鈴や小さなマラカスがある。小さな容器に米を入れて作った手作りマラカスがあるかもしれない。しかしこれらの楽器はリンリン、シャラシャラといったトレモロ音は出るがカチカチと細かなリズムを刻むことはできない。

本論で扱うミハルスは動きながら音が出せる上に、意

思をもって叩きたいリズムを叩くことができる。また子どもの手の大きさに合わせて作られているため使い易く、持ち方や音の出し方を指導しなくても、子ども自身がすぐに指を入れて鳴らすことができる。

ミハルスには以上のような特徴があるため、子どもにとって難しい技術訓練なしに楽に動きながら音の出せる楽器だということができる。

5-2 幼稚園における年長幼児とのかかわり

ミハルス（模作1）を試作した当初（1996年）筆者は、次のような子どもの反応を予想してミハルスを公立と私立の二つの幼稚園に持ち込んだ。それは子どもがミハルスを手に取り、カチカチ音を楽しみながら遊び、そのうち自由な身体表現が生まれるのではないかとという予想であった。

私立幼稚園として本学附属みどりが丘幼稚園の3歳児、4歳児、5歳児の各保育室にミハルスを持ち込んで1996年11月に調査を行なった。担任の保育者には一切説明をしないよう依頼して、だまって籠に入れたミハルスを保育室に置いた。その時の子どもの反応を大まかに以下に記しておく。

3歳児クラス：こちらから何も働きかけないためか、気付いても見ているだけの子どもが多かった。少しだけ音を出すと満足したのか部屋から出て行ってしまふ子どももいた。

4歳児クラス：「これなあに」「カスタネットだ」などと言いながら手に持ち、音を出して楽しんでた。それぞれに歌ったり踊ったり、口の前でぱくぱくさせて何やらしゃべったりしていた。

5歳児クラス：それぞれ両手に持ち、両手を広げて打ち、音を楽しんでいるようであった。ひとりの男児が両手の2個のミハルスの音の違いに気付いて、「これ音違うよ」と筆者の耳の近くで鳴らして教えてくれた。

公立幼稚園は、渋谷区立千駄ヶ谷幼稚園に依頼し、同上の方法で1996年12月に観察を行なった。机の上に置いておくだけで説明など一切しなかったが、子どもたちはカスタネットみたいだ、という認識をもったようであった。

4歳児では「ワニだ」といって口の前でパクパクしたり、カセットで好きな曲をかけて踊りながらミハルスを叩いていた。魚つりごっここの魚に見立ててミハルスのゴムの部分をひっかけて遊ぶなどというものもあった。

5歳児ではやはり口をパクパクするイメージが多く自

然に出ていた。口の前でパクパクさせながら、「ぼくアヒルくん」と言って歩き回っている子どもがいた。

この結果は、第50回日本保育学会において「表現活動におけるミハルスの役割」として口頭発表を行なった⁸⁾。4～5歳児では予想通りの身体表現が現われたが、3歳児で踊り出す子どもはいなかった。

5-3 3歳児とミハルスのかかわり

子どもの発達を考えた時、3歳児は年少幼児から年長幼児への中間にあり、移行期であると捉えることができそうである。ミハルスとのかかわりをみたところでも、4～5歳で現われる身体的、音楽的表現の前の段階として音そのものを楽しむ段階であるのではないかと考えられる。次の事例はそのような3歳児のものである。

本学附属みどりが丘幼稚園の1998年の3歳児クラスのものであるが、一人大変ミハルスに関心を持った子どもがいたために、興味ある展開が生まれた。一般的な3歳児とは言い難いかも知れないが次に記す⁹⁾。

【事例1】

日時：1998年5月

対象：本学附属みどりが丘幼稚園 もも組保育室

設定：ある朝登園して来ると保育室の中に見たことのないもの（試作2のミハルス）が置いてある。

観察：5～6人の男児が机を囲み、「なんだこれ」「なんだろう」と口々に言って触っている。ゴムの輪に左右から両手の親指を入れて音を出し始めた。両手で二枚の木片を掴んで開いたり閉じたりして楽しんでいる子どももいる。その後7分位同じメンバーで両手の人さし指や親指をゴムの輪に入れてカチカチ遊んでいる。この時点ではまだ誰も片手で持つことをしていない。ところが、男児Sが片手の親指と人さし指をゴムの輪に入れ、片手で音を出した。すると「見てごらん」とも何とも言わない

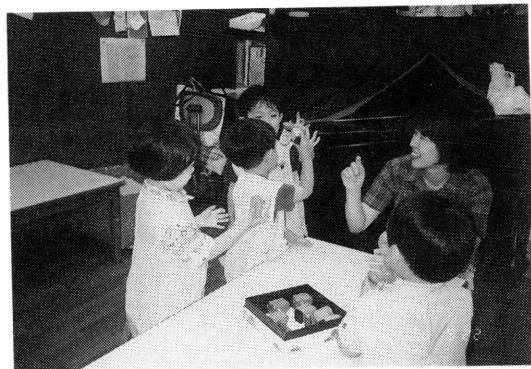


写真3 ミハルスで遊ぶ子ども（もも組）

のに数秒後にはその場にいた5人全員が片手で音を出し始めた(写真3)。さらにその2分後に男児Sが左右の手に一個ずつのミハルスを持つことを発見すると、またすぐに他の子どもも同様の持ち方を始めた。

「子どもは模倣から」とよく言うが、瞬時にその場にいた3歳の子ども全員が言葉を使わず見ただけで、その方法を学び取って模倣した。

その後他の4人は外へ遊びにいったが、両手奏法を独りで発見した男児Sはその後40分間もずっと部屋に残って、おもちゃを「クレーンだ」と云いながら掴み取ったり、絵本を読む子の耳を掴もうとしたりして遊んでいた。

考察：音を出す事と何かを掴む事、の二つの遊びを一人で交互に楽しんでいるようであった。つまり何かを表現するのではなく、この子ども自身が自分で叩いて出す音を聞いて楽しんでいる部分と、ミハルスをおもちゃとして何かに見立てて遊ぶ部分が交互に現われていた。まさにこれが移行期の特徴であろうと思われる。

6. 年少幼児のミハルスとのかかわり

年長幼児はミハルスを手にする事で、音を出しながら身体を動かしたり歌に合わせてリズムを刻んだりすることが、先行研究によって確かめられた。本研究では年少幼児がミハルスとどのように出会い、どのようなかわりをもっていくのかを調査する目的で観察する。

6-1 観察方法

幼稚園における年長幼児の調査と同様に、ミハルスが楽器であることやその音の出し方を説明せずに、箱に入れて置いておく。そして子どもたちが、初めて目にしたミハルスにどのようにかかわっていくかを観察する。同時にビデオによる記録も行う。そしてミハルスと出会ったあとはそのまま保育室に置いておき観察を続ける(約6ヶ月間の予定)。

6-2 事例研究

【事例2】

日時：1998年5月18日

対象：本学ナースリールームたんぼ組3名(1歳8ヶ月～1歳11ヶ月児)

設定：保育室の中のたんぼ組のコーナーのじゅうたんの上に6個のミハルスがばらばらに置いてある。外遊日から部屋に戻ってみると見慣れないものがある事に子どもたちが気付くように設定。

観察：

- ・最初に気付いた男児Rはじゅうたんの端を車を走らせるように何度も片手でミハルスを上から掴み動かしていた。
- ・次に気付いた女児Yは「なんだろう」というふうに手に持ち眺めているうちにゴムの輪がついていることを発見する。輪に指を入れブラブラさせて遊ぶ。
- ・初め興味を示さなかった女児MはYの持っているミハルスを見てほしくなり他のミハルスを持ってくる。
- ・間もなく昼食が始まるがYは食事中ずっと机の上においておく。食後は両手に持ってカチカチならして遊ぶ。時々鳴らすだけでなくずっと持ち歩く。午睡のベッドの上でも時々鳴らし、眠るまでずっと手から放さなかった。
- ・Mも食事が終わるとじっくり観察しながら開いたり閉じたりする。その後は手に持ち歩きそのまま眠る。

【事例3】

日時：1998年5月18日

対象：本学ナースリールームどんぐり組6名(2歳8ヶ月～2歳11ヶ月)

設定：どんぐり組の部屋にミハルスを置くと、子どもたちは担任に「これなあに」と尋ねるだろう。それを保育者が「何だろう」「知らないなあ」と云うのは不自然だという担任保育者の意見により、全く別の教室(リズム遊戯室)へ子どもたちといっしょに担任も探検に行き、そこにミハルスがあるという設定にした。どんぐり組の子どもたちは過去に数回リズム遊戯室で遊んだ経験がある。リズム遊戯室にある、子どもたちが興味を持ちそうなものは極力片付け、ミハルスだけを隅の椅子の上に、箱に入れ置くおいておく。

観察A：

- ・リズム遊戯室へ遊びに行き、初めのうちは広いフロアで走り回って遊ぶが、一段落すると部屋の中を見渡して、隅の椅子の上に箱に入れて置いてあるミハルスを発見する。
- ・女児Nは始めてミハルスを手にしたときから、アニメ「ひみつのアッコちゃん」の魔法のコンパクトをイメージしたようで、1時間の間に20回以上も「アッコアッコおひめさまになあれ」とまだよく舌のまわらない発音で呪文を唱えていた(写真4)。

考察：ミハルスの内側に丸い窪みがあるため、たてに開いて鏡に見立てたのであろう。内側がのっぺりしていたら、また別の反応がでてきただろうと思われる。



写真4 「おひめさまになあれ」

観察B：

男児Yはミハルスを箱の中にきれいに並べて入れる事に夢中になって何度も試みていた。途中でTやNがおみせやさんごっこの品物に見立てて「これくださいな」と買い物に来てもけて渡そうとはしなかった。

考察：

箱の中に作られる形に興味があるようで、左右対象に並べ変えたりして楽しんでいる様子だった。

観察C：女児Mはおでこにミハルスを開いた形でのせ、「おねつがでた」といって遊びはじめた。

考察：

ミハルスを開いたり閉じたりして遊んでいるうちに、180度開いて二倍の長さになると丁度熱を下げるための「アイス枕」と同じ大きさになることに気付いたようである。いつも新しく手にしたものをいろいろなものに見立てることの好きなMらしい発想であった。

【事例4】

日時：1998年6月～10月

対象：どんぐり組6名

設定：5月18日のミハルスとの出会いの後、どんぐり組の保育室にミハルスを置いておくことにした。しかし箱などに入れておいてもいつでも目に入っている状態とは言えない。食事や午睡の時には棚の上などに片付けなくてはならない。そこでいつでも見える状態でしかも子ども自身でいつでも手にとれるようにするにはどうしたらよいかを考えた。

透明なビニールのポケットがたくさんついた壁掛けを、保母が雑貨屋で見つけ購入してきた。そしてその透明ポケットに12個のミハルスを一個づつ入れ、床から70cm位の高さの壁にぶらさげた。(写真5)それから5ヶ月の間、子どもたちがミハルスとどのようなかわりをも

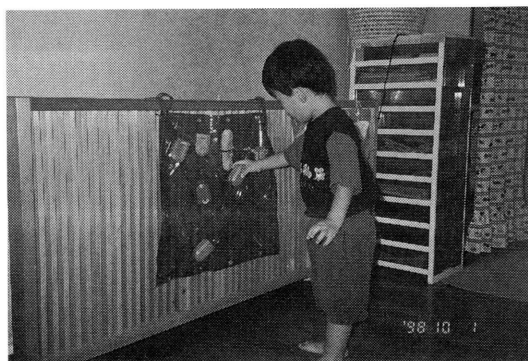


写真5 ミハルスを入れた透明ポケット

って生活しているかを観察する。時々訪問するだけの筆者は、毎日のように観察することはできない。そこで日々様子は担任保母より聞いて記録することとした。

観察：女児Nがミハルスのポケットの前でふと立ち止まりしばらく眺めて、独り言のように「白いのがいい」と言いながら一個を取り出した。

考察：さまざまな材質の木で出来ているので木の色も薄い茶色から黒檀の黒までいろいろある。どれも赤や黄色などの派手な色が塗ってある訳ではなくとても地味な色である。それにもかかわらず、Nがその時ミハルスを一個選ぶにあたって色で選んだことが大変興味深い。

観察：午睡の時にはミハルスのポケットに近いところに寝る子どもがミハルスを取り出し「カチッ」と鳴らし少し間をおいてまた「カチッ」と鳴らす。そしてミハルスを手にもったまま眠ってしまう。午睡の時にはミハルスを取り出してきてシーンと静かな部屋で「カチッ」と鳴らし気持ち良さそうにその音を聞いていることが、何度もあったということである。

9月中旬に筆者が観察に訪れている間にも女児Cが、眠いのに寝付けない様子で、ミハルスに手を延ばし取り出した。そして「カチッ」と2、3回音を出して楽しんだあと安心したように眠ってしまった。

考察：一日の中で最も落ち着いて静かな時間に、ミハルスを取り出して鳴らす等ということは、全く想像していない事であった。ミハルスは動きながら音を出し易いものだが、ベッドで寝ながらでもどのような体形で寝ても音が出せるようであった。木と木の音が素朴で心地よく感じたのだろうか。

7. 結果と考察

本研究において年少幼児とミハルスとの初めての出会い

いを設定して観察したが、はじめての物との出会いはそれぞれ、その子らしさが出ると感じた。いつも新しいものを見たときに、積極的にそのものとかかわっていく子は、今回も興味深そうにあれこれ触って眺め、考えているようであった。

子どもたちはミハルス楽器だとは認識していなかっただろうし、見慣れない木の玩具、くらいに考えていたのだろう。車に見立てたり、お菓子里にしたり、アイス枕にして寝た子のおでこにのせたり、実に多様なイメージが広がっているのを確認できた。

事例として挙げてはいないが、やはりパクパクと口にしておしゃべりをたのしんだり、ものを掴み上げて遊んだりした子どもは多かった。

祭りの小さな御輿みこしを作って担いで遊んでいたとき、担ぎ手に加われなかった女兒3人は、ミハルスとタンブリンと鈴を手に御輿の回りを鳴らしながらまわりはじめた。祭りの御輿のイメージから鳴りものを加えたのは、人間の本能的なものなのだろうか。それを見ていた保育は「なぜ御輿の取り合いにならず、楽器を持って一緒に練り歩くことになったのか不思議だった」とその時を思い出している。

御輿にミハルスを加えたような「動の方向」への反応は、本研究を始める前からある程度は予想出来たことであった。しかし、午後の昼寝の前に音を出して「静の方向」へ気持ちが動くという反応は全く予想外の事であった。

現在の子どものおかれていた環境は刺激的で、派手で、激しいものが多くなっている。おもちゃにしても、子どもの興味を引くような赤や黄の色が塗ってあったり、大きな音やベルやブザーが鳴ったり、光って、めまぐるしく変化するものが多くなっている。最近ではもっと刺激を強くするために匂いをつけたり、煙がでたりするものまである。つまり、いろいろに自分で見立てて遊びが広がるおもちゃが少なくなっている。TVゲームを例に出すまでもなく、受け身になってルール通りに遊ぶものが多すぎるのではないだろうか。

音の環境も特に都市部では悪くなっている。一日中騒音の中で暮らしていると言っても過言ではないだろう。朝からTVの音がずっと流れている部屋にいて、家電器具はピピッと電子音で知らせる。一步家の外へ出れば車の音や工事の音が聞こえる。駅の放送も機械の音声で何度も無意味に繰り返している。電車の中でさえヘッドホー

ンをした若者の耳もとからかなりの音量が漏れて聞こえる。建物の中では、エレベーターの中でさえBGMがかかっている。そして何より恐ろしいのは、そういった騒音の中に暮らしていることに人々が気付かなくなっていることである。

自然の音にゆっくり耳を傾けることがなくなったこのような状態では子どもの感性は育たない。特にしっとりとした、ささやかなものへの感性が失われているのではないだろうか。午睡の時間を設定しない幼稚園では保育所と違って、シーンとして耳を澄ます時がないのではないかと筆者は以前から問題視している。耳を澄ましてもっと聞こう、とすれば聴覚以外の五感も同時に刺激され、イメージの世界がもっと広がるであろう。

ミハルスは派手さはないが、木と木のあたる音が心地良いとみえ、午睡の時シーンとなるとカチン・・・カチンと鳴らす子がいる。カチカチ鳴らすのではなくポツン・・・ポツンという感じで鳴らす。木と木を鳴らす音と子どもの片手に収まる大きさがよいのだろう。

2歳の子どもたちがこれほど小さな音を大切にしていることが、本研究によって確かめられた。これはどんぐり組の子どもたちが感性を共有できる保育者と日々いろいろなものに感動する生活を送っているからにはほかならない。そしてもう一つの理由は子どもたちの周りに、自然などのささやかな刺激がたくさんある事も原因であろう。しかしこの子どもたちも3歳4歳と年齢を重ねるにつれ、より強い刺激を受けることが多くなっていくだろう。そうすると徐々に、ささやかなものへ反応しにくくなってしまいう危険があるのである。

8. おわりに

今回ミハルスは子どもの動きの表現を引き出すものとなるだろう、という筆者の予想が、年少幼児によってはずれた。1～2歳の子どもたちは木と木の打ち合わされる自然の音をそのまま聞いていたということであろう。またボタンを押すだけで画面が動くゲーム等とは違い、自分の意志で二枚の木片を開いてから打たないと音がでないミハルスの人工的でない素朴さを楽しんでいるようでもある。

今後は、子どもの様子を年齢や発達の違いによって細かく見つめながら、さらにミハルスと子どもとのかかわりを観察し続けたい。そして子どもが気付いたように木の違いによる音の違いにも言及していきながら、感性の

育ちを見ていきたいと考えている。

尚本研究は第50回日本保育学会に於いて口頭発表した「表現活動におけるミハルスの役割」と、第27回関東地区大学音楽教育学会に於いて口頭発表した「幼児が楽しく使える楽器ーミハルスを考えるー」を基に加筆したものである。また、私学財団特色のある教育研究助成を受けている。

註

- 1) 細田淳子「保育における器楽教育の導入」
pp.113～119 東京家政大学研究紀要 第36集
1996
- 2) 細田淳子「ミハルスの存在とその現代的意義」
pp.29～43 東京家政大学生生活資料館紀要 第2集
1997

- 3) 細田淳子「表現活動におけるミハルスの役割」
pp.444～445 第50回日本保育学会論文集 1997
- 4) 金子隆芳他編著「多項目心理学辞典」教育出版(株)
1991
- 5) 寺内定夫『感性があぶない』p.3 毎日新聞社 1989
- 6) 片岡徳雄「子どもの感性を育む」NHKブックス
603 日本放送出版協会刊 1990
- 7) 前掲(3) p.445
- 8) 第50回日本保育学会にて「表現活動におけるミハルスの役割」として口頭発表 1997年5月
- 9) 第27回関東地区大学音楽教育学会にて「幼児が楽しく使える楽器ーミハルスを考えるー」として口頭発表1998年6月

Summary

There has once been a musical instrument called "Mihalus" in Japan. Holding the instrument in both hands and beating each pieces, children can make sounds while they are dancing. It disappeared about fifty years ago, and has never been used since then.

Yet, it seems to me that Mihalus may be very helpful for early childhood education, and thus, I tried to reproduce it and gave chances to children to use the reproduced Mihalus. In the previous research, I have shown that three to five year old children played Mihalus while dancing.

The purpose of this research is to observe the reaction of one to two year old children to Mihalus. It was observed that the sound of Mihalus seemed to make the children feel peaceful. This result is quite different from the one of the previous research on three to five year old children; they began to dance when they played Mihalus.